

反障害通信

13. 2. 22

41号

橋下大阪市長と体罰問題

橋下大阪市長の体罰事件・問題での言動はむちゃくちゃです。

スポーツ部活での勝利第一主義が体罰を生んだという押さえ方をしているのですが、何も体育だけで体罰があるだけではないのです。体罰やいじめは競争・競争ということの中で出てくるのです。その橋下市長が大阪府知事に当選して最初にやったのが競争をあおる教育改革だったのです。それが体罰をうむ土壌を耕した、体罰を増長させることにつながるという自覚はないのでしょうか？ その反省の上に立って、入試中止などという圧力をかけるよりも、まず市政の「最高責任者」として、自分の市長としての職務を中止・辞任することではないかと思うのです。

わたしは「障害者」関係の体罰・いじめ裁判の支援をしていて、あちこちで裁判の傍聴をしてきて体罰—いじめについていろいろ資料を読み考えてきました。体罰というのは「指導者」がちゃんとコミュニケーションをとろうとしない、「指導力」を持ってない中で、自分の考えを押しつけようとするところからうまれてくるのではと思うのです。橋下大阪市長の言動をみていると、橋下市長の性格は体罰をふるう「教育者」「指導者」と同じ性格・同じ考えなのです。

他者の意見は自分が判断するための情報でしかなく、対話集会とかやるのは、ちゃんと他者の意見を受け止めるのではなく、対話ではなく自分の意見の押しつけなのです。橋下市長が「いいおとながちゃんと他者の意見をききなさい」とか言っているインターネットで流されているビデオをみて笑ってしまいました。他者がはなしているのを遮り、割り込み、自分がとうとうと話す。どうも、自分がいつも言われていることを何の反省もなしに、他者に言っているのです。

このひとは独裁をいい、そして自分は選挙で選ばれた、文句があるなら次の選挙でおとせばいいとか、そもそもちゃんと対話する意志がないのです。

橋下市長は、そもそも体罰は必要だという考えをもっていたのですが、それが日頃の言動とむしろ一致します。それを、行政の長として法に反することをいうのをまずいとか、ある有名人が「体罰は何もよいことはない」とか言ったということで、彼のポピュリズムにおいて、表面的に転換したのですが、一度体罰やそれと通底するいじめがどこから起きてくるのかをちゃんと考えてみるとよいのです。ちゃんと考えることをできない、しようとするひとなのでしょうが。

石原慎太郎前東京知事と一緒にあって「維新の会」という形で動いているのですが、いろいろ違いがある上で、ふたりの共通しているのは、そこにファシズムの芽があるという

ことです。いや、むしろ脱原発に反対する在特会などの動き方をみていると、ファシズムの流れが形成されてきているのではと思うのです。今のところ「維新の会」あたりがその中核になりそうで、わたしたちはきちんとそれを批判し、流れをとめていかななくてはなりません。

(み)

読書メモ

最初は前号の巻頭言で紹介していた本へのコメントです。そして『図書新聞』に載っていた書評で、「橋下擁護」とかいう言葉が気になって、急遽挟んだ本。部落差部はきちんと批判しなくてはいけないのですが、そのことで、別の形の差別としてのファシズムの流れの路を助長させてはいけないと言うことでの押しえです。そして二つのバイオテクノロジー関係の本。これもわたしが長年課題にしていたこと。でも、まだまだ不勉強さを感じてしまって、得ることの多かった2冊です。

たわしの読書メモ・・・ブログ 221

・大島堅一『原発のコスト——エネルギー転換への視点』岩波新書（岩波書店）

「原発のコスト」というタイトルを見て、反原発の立場からも「コスト以前の原発の危険性」という批判が出てきそうです。この本の（裏）帯に「原発は安い」を徹底検証する！」という見出しのあとに「(本書より)」として「将来世代に放射性廃棄物と事故のリスクという巨大な負の遺産を残すのか。再生可能なエネルギーを中心とするエネルギー体系を残すのか。これは、私たちと将来世代にとっての、コストの問題である。「原発のコスト」を回避すること、これは脱原発によってのみ可能である。」(211P) (下線たわし)とあります。

この著の中で、お金に換算できない被害とか「社会的コスト」という概念がでてきます。まさに、そういうことも含めた「原発のコスト」を回避するコストの問題としてこの著はあります。

昨年末のNHKの解説委員同士の議論の中で、「原発の神話は安全神話だけでない。安定供給と安価という神話もあった」という意見が出ていました。わたしはそれを「三安神話」ととらえ直しているのですが、まさにそういう神話をきちんと押しえ批判している書で、この本の帯の表帯に「大佛次郎論壇賞受賞」の大文字の下に「事故の前から、原発は安くなどなかった一。エネルギー問題が焦点の今、脱原発の基本書」とあります。

自民党政権が復活し、再稼働へ向けた動きが加速しています。自民党政権の復活は、間違っても原発再稼働が支持されたからではありません。選挙の焦点として景気・雇用問題が第一義的に浮上し、「経済成長」というこれも神話にとらわれたところの問題です（その「経済成長という神話」も「原発の神話」を構成してきたのです）。世論調査などを見ると依然「原発の神話」は消えていないのですが、この書は実に考えられる「コスト」問題について詳しくとりあげ、逐一要点をつかんだ批判をしています。ですから、これで論争に決着がついたとストーンと落ちる書です。わたしの反原発の立場からの偏りがあるかもしれませんが。この著は、まさに「原発の神話」未だとらわれているひとたちに是非読んでもら

いたい書です。そして、できるなら批判をだしてもらうことによってまさに決着へ向かっていくでしょう。たぶん、神話にとらわれているひとたちは、ちゃんと自ら本を読むことも含め情報収集しないだろうと思うので、少しずつでも、この書で書かれていることを広めていくことによって、原発問題に決着をつけうらと思うのです。使用済み核燃料や核廃棄物など負の遺産の膨大化や再びの事故でとうしようもなくなってストップする以前に！

さて、いつものようにメモです。

(被害補償の問題で) 生活再建の視点の欠落 P51

市場経済の原理による原発からの撤退 85P

支援機構法の批判

「株主、債権者をはじめとする関係者の責任と費用負担と責任を不問にした」 86P

項目を増やさなくても安いとは必ずしも言えない P96

さらに、政策コスト、バックエンドコストをくわえれば
コスト項目の範囲 P96

原子力立国計画に抜け落ちていた安全性の概念 P135

原子力安全委員会の職務放棄 P143

(安全神話の中で)「原子力の安全性に問題があるのではなく、原子力の安全性に異論を差し挟む人が問題があるかのようになっていった。」 P155

原子力複合体 P160←原子カムラ

原発のコストの回避 P211 冒頭引用

隠蔽によるコストの無視 P211-212

たわしの読書メモ・・ブログ 222

・宮崎学／小林健治『橋下徹現象と部落差別』にんげん出版（新書）2012

これは『図書新聞』3095号でその新聞の編集者の米田綱路さんが書評でとりあげていた本です。

橋下大阪市長に対する『週刊朝日』誌上での差別記事については、朝日新聞やテレビでちらっと取り上げられていて、朝日新聞系列の会社で、なぜこのような差別と自明なことを載せたのか、差別の問題がここまで風化しているかのかの思いを持ちました。ですが、部落解放運動の蓄積において、きちんと整理されていくだろうと思っていました。わたしがいろいろコメントしていく必要もないだろうと。

で、この本が出ていたのですが、こと部落差別ということに関しては、すごく整理されていると思えたのですが、反差別総体というところからのとらえ返しで、どうもおかしいとの思いを持ちました。それは「橋下を擁護する」5Pとか、(橋下さんの週刊朝日との対応は、)「一人解放同盟だ」137Pということを書いていると紹介されてることです。

「擁護」という言葉がわからないのです。かつて、暴力団新法がつくられようとしていたとき、保安処分だとして、左翼的なひと・グループも批判していました。でも、それは「暴力団を擁護する」とはならないのです。それは橋下氏への部落差別は徹底的に批判するけれど、橋下氏自身が他の差別の問題については差別者としての言動を繰り返している

から、そのことへの批判もきちんとやっていくということではないかと思うのです。

わたしは差別を問題にするひとの中には、「自分が差別をされることには差別として告発するけれど、他者が差別を受けることには知らない—構わない」とかいうことがあるし、差別されるのはいやだ、差別する側になりたいというように動くひともいます。橋下氏を「一人解放同盟」などと評価するのは間違いです。確かに、部落解放運動の糾弾の論理は情報としてとりいれているけど、部落のひとたちへの仲間意識をもちあわせているとは思えません。解放同盟には、「きょうだいたちへの差別をゆるさない」という被差別者としての仲間意識をベースにした団体であり、そして他の差別の問題への連帯の意識があります。橋下氏は、なにが差別として告発されるかのそれなりの情報は持ち合わせていますが、競争原理主義的な世界観をもつ差別者・差別主義者です。

大阪市長選で橋下氏への差別に反発して橋下票が増えたという評価、確かにそういうひともいたのかもしれませんが、橋下氏を当選させたのはファシズム的なエネルギーではないかとわたしは危機感を募らせていました。それは東京都知事選で圧倒的差で石原氏が当選していたこととつながることです。

わたしは市長選で、平松陣営から橋下候補への部落差別を批判する声明のようなことを出す必要があったのだと思っています。

もう一つ、書いておきたいのは今回巻頭言にも書いたように彼の他者の意見をきちんとうけとめようとしない、上から目線の物言いで、自分の意見を押しつける対話が成立しない話し方、議論の仕方自体に差別的なことがあるということです。

そのあたりのことを、対談で進むこの本の中ではとらえていません。

そもそも宮崎さんの話し方自体が橋下さんとよく似た上から目線の話し方なのです。

今一度差別ということを総体的にとらえ返したところから、問題をとらえ返していく作業が必要なのだと思います。

擁護 P5 P136

差別記事

DNA ということ自体が優生思想の中ででてきたことという押さえ

出自を問題にすること自体の差別性

覚悟の差 P54?・・・「道義性」

風化 P89 差別は風化していない、運動の風化

一人解放同盟 P137

相互扶助 P158

どっちを選ぶのか P201・・・どっちも選ばない

当事者性のない P199・・・むしろ責任の問題

糾弾 P231-232

井上ひさし「本人がどうしようもないことで非難してはならない」・・・わかりやすい、しかし自己責任論になってしまう側面も

・福本英子『人・資源化への危険な坂道—ヒトゲノム解析・クローン・ES細胞・遺伝子治療』現代書館 2002

『福祉労働』で福本さんの連載記事があり、その中の筆者紹介の中で紹介されていた本です。

この本は政府の審議会などの動きを中心に押さえた本です。福本さんは自分は素人で学者でもジャーナリストでもない P318 という書き方をしているのですが、取材という形でインタビューし、事実関係をきちんと伝えるというスタイルはまさにジャーナリストの姿勢なのです。最初から自分の立場を突き出していくのではなく、ジャーナリストに論じていく中で、自分の意見も織り込んでいくという手法です。姿勢としてはきちんと「人・資源化」への批判という立場なのですが。

審議会・委員会などが、そもそも根本的な議論をスポイルしたところで、審議会が実用倫理的なところで、「規制緩和」という方向で進んでいくおそろしさがあります。

そして、それがどうもナショナリスティックな科学立国というようなところでの、政府がバックアップした技術の進行として進んでいくようです。規制ということが、実は推進を意味するという、これは原子力規制委員会も同じなのですが、科学がこのように進んでいく構図が繰り返されています。

根本的な議論がなされないままに進んでいく恐ろしさを押さえ、結局どのような社会にしていくのかという選択の問題として押さえ直す必要があると、筆者は主張しています。資本主義社会においては目先の利益を追求していく構図で、結局このとをスポイルしていく、それがまさにここにも現れているのです。

予防は優生学ではないというごまかし P14・・・否定性というところからくる予防は優生学

映画の宣伝と科学 P104・・・まさに現実に進んでいることを抽出し純化した形でのストーリー

実験医療と自己責任 P167・・・自己責任という言葉での強要

体細胞の遺伝子治療による生殖腺汚染と発がん、がんの成長 P171

効いたという効果があがらず、安全性を否定するデータが出てくるのに、人体実験を進めるのは、患者被験者の「自己責任」以外にあてにできる“倫理”はないということ P172

規制が推進を意味する P229・・・原発規制委員会も同じ

実用倫理 P245・・・倫理ということのもつごまかし

最初に根本的な議論をしないで、先に技術の部分的規制をつくりそれをゆるめていく・・・順番が逆 P247

口をぬぐったままの進め方・・・欧米を出し抜くために P279

「各国で生殖細胞遺伝子治療を禁止し、体外受精の使い道を不妊医療に制限してきたのは、これらの操作が人間改造や人間育種につながり優生学を呼び戻す危険が大きいためである。」 317P・・・「治療という名の医療」の中にすでに優生思想が孕まれている

「生命倫理とは、人からどうやって身にまとった文化や人格や法的社会的保護を剥ぎとって「ヒト」にし、混乱を避けつつこれを資源にするかを定める政治的手法であるらしい。少なくとも官印の生命倫理はそうであるようだ。」 P319

「バイオ工業社会における支配-被支配の関係ができてしまっている」 P319

「豊かさを失わず、際限もなく病気やケガが治ってもっと長生きするために「ヒト」になるのか、それを拒否して「人」であり続けるのか。もう態度を決めなくてはならないところに来ているのだと思う。言い換えれば歴史のパラドックスに踏み迷って人・資源化の“破滅の坂道”を転落ちるのか、そうならないために今から骨の折れる軌道修正をするのか、どちらをとるのかということである。」 P319-320

たわしの読書メモ・・ブログ 224

・柘植あづみ『生殖技術——不妊治療と再生医療は社会に何をもたらすか』みすず書房 2012

本屋の店頭で見つけた本です。

自己決定—自己選択の名による不妊治療や再生医療がいかなるところの決定や選択であるのか、そこにおける差別の構造ということをしつかりと押さえています。

いつもと順序を逆にして、先に抜き書きをしてみます。

不妊の医療化 P2

わたしたちがどんな社会を築いて行きたいか P4

社会的偏見 P9

精子や卵子提供がなぜ問題になるのか? 5点 P52-53P

リスクが高い、必要とする理由が本人の生命に関わることではない、「子供をもちたい」という理由が認められるのかとその手段の行使の倫理的問題、生まれる子供の心理の問題、規制や対応が法制度的に統一されていない—問題が整理されていない

「ヒト」という表記の問題 P35

人体の資源化の推進という問題性 P94

グローバルゼーションとナショナリズム下の人の資源化・・・iPS細胞

「治す」ことの強要という存在の否定 P95

「自然な身体」と「治すべき身体」 P97-98

スティグマを押しつけられたマイノリティ P105

愛情の底の母性イデオロギー P109

不妊の苦しみの中身 6点 P122

6点とは①子供いないことがマイノリティになる、②「家父長制」イデオロギーや「母性」イデオロギーによって逸脱したカップルとみなされる、③子を持たないということで「愛情」表現をなしえないということでの自己評価の低下、④「産めない」ということが女性にとってジェンダーアイデンティティの危機ととらえられる、⑦「自然な身体」が本来は有する能力がないことで、劣った—「異常」ととらえられる、⑧不妊治療という医療で自己身体から疎外されていく・・・いずれも差別ということで読み解けます。

エゴ的な愛から次世代を育む意識 P127

不妊の脱構築 P127

差別的イデオロギー解体の対象・・・家父長制イデオロギー、母性イデオロギー、ジェンダー規範、「自然な身体」モデル

不妊の苦しみとは何かをとらえられない中で、問題化していく P154-155

ニューヨーク裁判所—「患者の権利章典」—「ボストン女の健康の本集団」 P175

WHO の「遺伝子診断に関するガイドライン」・・・自己決定であるから優生思想ではない P181-182

ミースの自己決定批判と共生 P183-184・・・差別社会における共生の中身

イリイチの女性問題が提唱してきた自己ケアが医療支配を脱し得ていないという指摘 P185

意志決定における背景や過程の検証の必要 P186・・・筆者の提起

自己決定をめぐる関係論的なとらえ方 P186

「自己」とは、諸関係を切り離して存在するのではなく、個人主義であっても集団主義であっても、意志決定は関係の中に存在する。・・・(中略)・・・日本は北米よりも集団主義的な文化だと指摘されることが多いが、その場合にも、家族・共同体・国家が期待する方向の選択を押し付けることへの抵抗の権利として自己決定権が保障されるべきである。ただし、その背景を考慮せずに、単に技術を選択肢として示し、「技術を使うか使わないかはあなたの自己決定だ」とするのは乱暴すぎる。「自己決定」や「自己決定権」を主張するならば、どのような関係性もしくはシステムを築けば、圧力の対抗手段としての自己決定(権)が保障できるのかを考え、その環境をつくりあげる努力が必要である。」・・・別なところで書かれているのですが、むしろ、自然な欲求として関係がとらえられないことが問題なのです。圧力への対抗手段を保障するという現実主義的な対応も必要ですが、そもそも圧力自体をなくすことが必要なのだと。

自己身体に他者性感じるからこそ「自己」が成立する P189

「やっかい」と感じること 189P

自己をコントロールするということでの医療の成立

胎児を他者として意識することによる自己決定という論理が出てくる P190

自己決定の名による医療への客体化 P192

自己決定を保障する条件・・・選択の保障とその決定を尊重するという周囲との関係や制度の存在の必要 P193・・・差別的な関係の中でありえるのか

選択というごまかしと自己責任論 P195

「選択するための情報・知識・経験などを含めた社会資源・文化資源の格差をそのままにしては、抵抗する力を奪いとられる。そんな時代に、あらためて「自己決定権」について考えることは意味があると思う。それは「自己決定権」を生殖に関わる諸問題・課題の解決方法として最良であると思うからではなく、「自己決定権」や「選択」の限界や問題を解消する新たな概念について考察するために必要だからである。」

医師と患者のコミュニケーション P206

選択しないことが得なこと P208

不妊の問題は社会的問題で社会的解決が必要 P215

欲望を生み出す市場原理 その中での不妊治療や再生医療 P222

自然でない—子供を産まない むしろ子供を産まないということも自然な P222

「技術がもたらす新しい家族形態を前にしてうろたえるのではなく、技術を管理する思想的枠組みについて話しあおう。」 P224

「医療でできないことがあり、私たちには医療にできない問題を解消したり、軽減することができるはずだ。そう人々が思う社会を築きたい。」 P229

不妊治療や再生医療は本人たちの自然性的な欲求と自己決定においてなされ、それを尊重しなければならないというような言説の下に進んできているのですが、この本はその「自然な」というところの問題をイデオロギー（家父長制イデオロギー、母性イデオロギー、ジェンダー規範、「自然な身体」モデル）としてとらえ返しています。また、その欲求のもとになる苦しみ（不妊の苦しみ etc）なることを、「社会的」—関係論的などところでとらえ返しています。（*）そして、これは結局わたしたちがどのような社会を関係を作っていくのかという選択の問題として提起しているのです。それは、たぶん不妊や再生医療というところから、もっと幅広く深く「社会」や関係をとらえ返したところで、それらのいろいろな問題がどのようなこととしてあるのかを押さえ直したところで、それらの問題をどう解決していくのかという処から、どのような未来図を描いていくのかということに導かれていくのかと思います。わたし自身はそれらを差別ということをキーワードに読み解き、どう解決していくのか、どういう提起がしていけるのかを考えています。筆者はそのことを不妊治療や再生医療というところから鋭く切り込んで、提起しています。この本はわたしにとって大切な本で、とても刺激になりました。

*これは「社会的な関係を自然的な関係と取り違える」とマルクスが規定した物象化の問題として押さえることができます。

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

◆「反障害通信 41 号」アップ(13/2/22)

◆三村出版本に対するオープンな批判・意見をこのホームページに掲載していきたいと思っています。とりあえずリアルなやりとりをブログでやりたいと思っています。「対話を求めて」というカテゴリを作りました。そこの「本を出版しました」にコメントという形で応答して下さい。もちろん連絡さきにメールくださっても構いません。メールをされない方は携帯に **090-9857-3431** に連絡ください。

「子ども化」ということ

歳をとると子どもに帰るといふ言い方があり、わたしもそういうことを言ったり、書いてきたのですが、母の介助をしながら、ちょっと違うのではと思い始めました。

子どもと高齢者の共通項があるとしたら、「依存的である」ということ、そして「認知の集積が少ない」－「認知の集積が減少していく」ことなのでしょう。そもそも「依存」という言葉自体が、「自立」なり「自律」なりの反対語で、ひとは自律すべし、できるだけ自分のことは自分でやる方がいい、というところで、「依存」という言葉があるのだと思うのです。ですから、そもそもなぜ、「依存」ということばがあるのか、ということ自体をとらえ返さなければと思うのです。

このあたりは「身辺自立」という「障害者」差別的なことのみならず、西欧的近代的自我の論理やそれを背景にした「自己決定し得る者だけをひととして認める」というようなパーソン論などへの批判が必要ではないかとも思えるのです。

後者の「認知の少なさ」に関しては、そもそも「認知症」とか「知的障害者」の問題とその否定性にもつながっていきます。

「認知症」に関しては、わたしは何冊かの本をよんでいるのですが、そもそも「認知症」とは何かと考えていくと訳が分からなくなります。CTスキャンをとって、それで「認知症」とかいう診断を医者が出したときに公的には「認知症」ということになるのでしょう。ですが、そもそも「認知症の症状」といわれる「記憶障害」とか、「物とられ妄想」というのは「認知症」という診断を受けていないひとにもおきていることです。

ですから、「認知症」という診断があるかどうかという問題ではなく、実際の生きがたさを押さえ、それがどこからきているのかを押さえる作業が必要です。

この間 NHK で「認知症」の母親の介助をしているひとが漫画とエッセーを描いているひとのドラマ仕立てのドキュメントのようなことをやっていました。

現実の介助のしんどさはあるけど、必ずしも「認知症」は否定的にはとらえられないというようなことを描いていました。

わたしの母の場合は、「認知症」の診断は受けていませんが、高齢者でそれなりに似通ったことはあります。でも、現実には介助の体勢が作れないなかでのしんどさがあるにせよ、それなりの楽しさも感じています。そのあたりのこと、もう少し具体的に書いていきたいと思っています。

時局川柳（7）

規制言いごまかしうその推進よ
成長は生保切り捨て誰のため
目先だけ株価あがるも破綻待ち

『反障害原論』への補説的断章 (16)

反差別、反資本主義、反「環境－生命破壊」の トライユニティ（「三位一体」）の運動を！

脱－反原発の運動や沖縄の反基地の運動、そして反貧困、そしてマスコミではほとんど報道されない反資本主義志向の労働運動など、今、あちこちで直接行動の動きが出てきています。

そういう中で、福島－沖縄という地域差別というところからの連帯の志向は出ていますが、連帯ということは言われても、それらのことを結びつけてとらえる観点がなかなか鮮明化されていません。

それらを差別ということ 키워ワードにし、読み解く作業をしていけるのではと考えています。

その中身を一応、反差別、反資本主義、反「環境－生命破壊」という内容で押さえています。けっしてそれらはバラバラなことではなく、「三位一体」的なこととして繋がっていることなのだと思います。「三位一体」は英語で **trinity** として、キリスト教の概念からきているのですが、キリスト教が今日<帝国>的グローバリゼーションの背景的宗教として機能してきたところで、その教義のようなことを持ち出すのは自ら抵抗を感じてしまうのですが、別々のこととしてとらえられるけど、実は繋がっていることとして、「三位一体」を和英すると出てくるひとつの語 **triunity** を、わたしがグローバリゼーションの反対語として突き出そうとしている「ユニバーリゼーション」に繋がる語として、造語的に使用してみたらと提起します。

現実とその繋がりをわたしは「反差別論序説草稿」の中で書いていたのですが、そのあたりをもう少しはっきり意識化して書いてみようと思っています。

そして、「社会主義国家」の崩壊以降、社会変革の運動が方向性を見出し得ない、大衆的に拒絶されていることを突破していくこと。そして差別ということ自体がタブーになっていくような状況さえ生まれていることを押さえ、これまでの運動の負の側面を、この反差別という観点から、総括していく作業もできていくし、その中で改めて、変革志向の運動の再生をなしていく糧になるのではとも考えています。

反差別はこれまで、個々の課題という形で繋がりがとらえにくくなっていました。わたしは差別の構造というところで「個々の」ととらえられることが繋がっていることとして押さえられるのではないかと考えています。その差別の構造ということの土台として資本主義的生産様式があるとして、反差別と反資本主義は繋がっています。資本主義は目先の利益を追求め、ひとを物化しているところで、未来世代からの生きる条件を収奪していく環境破壊や命の破壊という差別の問題がそこにあります。時間軸の問題としてもそれはとらえられます。

これらのことを、わたしはどう繋がって行くのかを読み解きながら提起していきたいと思えます。

(編集後記)

◆前号が遅れてしまったので、今号はちょっと早めに出しました。少し生活のリズムがつかめたのかなという感じですが、いろいろ不安定要素があるので、いつ何時どうなるか分からないので、できるときにどんどん出していきます。「隔月より短く」を目指しつつも、柔軟にやっています。

◆「読書メモ」、読書がやっと元に戻った感じです。というよりも、翻訳本や認識論的な内容がある本で躓くようです。そのうちに本が読めなくなるときが来るのかも知れません。積ん読している本がどんどん増えています。ちょっと障害問題関係に力を入れようと思っています。

◆原発震災からもうすぐ二年になります。前回の巻頭言を書いていたときに読み進めていて、勧めていた本を読み終えました。事故前にちゃんと取り組んでこなかった反省と、風化させるものかという意志を込めて、前回の巻頭言を書きました。神話を崩壊させるのは論理性なのでしょうが、論理や理論というものはなかなか浸透していかないという思いを強くしています。

◆介助日記は、日記的な読みやすいものにしようとしているのですが、母との関係もあって、いろいろ母がいやがることを書いてしまいそうで躊躇していたら、またもや理論的なことに走っています。本文中書いた漫画の本を手に入れました。岡野雄一『ペコロスの母に会いに行く』西日本新聞社発行です。この本はお薦めです。この漫画は「認知症の否定性」の固定観念を突き崩してくれます。マンガとか、小説とか、音楽とか感性にうったえるものが届くののだとの思いを改めて強くしています。そのようなことの疎いわたしが何とかそのようなことのまねごとの方法というところでエッセー的な手法を考えていたのですが、なかなか書けません。そのうちに、その方向へ開くようなことを書き始めるつもりです。「不安ということ」「悪循環」というタイトルが浮かんでいます。まあ、とりあえず、思いつくままに書き進めます。

◆川柳に解説を入れることに違和感を感じています。その短い句の中でわかるようにすることなのですが、なかなかうまくいきません。で、解説文つきにしてしまうのですが、今回は川柳だけにしてみました。まだまだ川柳もどきですが。

◆最後の『反障害原論』への補説的断章(16)で、差別の問題として切り込む作業してみました。今回「読書メモ」でとりあげたバイオテクノロジー関係の二冊の本でも、期せずして、結局「どういう社会を作るのか、どういう未来を描くのかという問題」とかいうことに至り着いています。「未来を描く」というとユートピア志向批判が出てきます。根本はひとつひとつの矛盾をとらえながら、関係性総体をとらえ返し(それは差別の構造とかいえること)、そのなかで問題解決の道筋をとらえ返し、そこではじめて、運動の方向性が出てくるということなのです。ですが、今何か社会は結局変わらないという空気が強くなり、運動としての指向性がなくなり、問題解決のための活動としての運動が、自己表現的活動に収束してしまっている感があります。改めて問題をとらえ返し作業をしていく、そのことはバラバラの問題ではなく、差別ということ 키워ドにして読み込んでいくということを考えています。

反障害－反差別研究会

新しい出発に関して二項目を追加しました。

■会の性格規定

今、‘障害’という言葉ほど混乱した使われ方をしている言葉はありません。わたしたちは「障害者が障害を持っている」という医療モデルから、「障害とは社会が障害者と規定するひとたちに作った障壁と抑圧である」という「障害の社会モデル」をとらえ返し、更に、「障害とは関係性の中で、「障害者」に内自有化する形で浮かび上がる」という障害関係論への、障害概念のパラダイム（基本的考え方の枠組み）の転換を図ります。そのことを通して、障害のみならず他の差別をなくしていく反差別の理論を作り上げ、その運動に参画していきます。このホームページにアクセスしてきた方との議論の中で、ともに深化と広がり求めていきたいと願っています。

■会という名で出していますが、まだ個人発の一方的発信の域を出していません。もとより、働き掛け合いとして設定したこと。読者の皆さんが活用して頂けたら、またメーリングリストみたいな形に展開していけたらとも思っています。

■連絡先

Eメール hiro3.ads@ac.auone-net.jp

HPアドレス <http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/>